

## セブ島語学研修で得たもの

清松敏雄ゼミ 経営情報学部3年 及川 美穂

8/30～9/13までの2週間は、自分にとって今までにないほど、貴重な2週間となりました。また、この経験で少し自分の成長に繋がった気がします。少なくとも、行く前と後での変化はありました。

私がこのセブ島語学研修に参加した理由は、行ったことのない世界に行って、もっとたくさんの事を経験し、知りたいという好奇心からでした。

研修内容は、マンツーマンの英語の授業で1コマずつ担当の先生のブースに行き、授業を受けるというものでした。授業は、文法や発音、会話などの授業がありました。先生はほとんどがフィリピン人で、授業中は英語のみです。なので、先生の英語が分からないときには、先生がまた別の英語で説明してくれたり、辞書で調べたりしていました。

この語学研修で学んだことは、間違いを恐れないということです。これは誰もが小学校に入ったくらいから何度も言われてきたことだと思います。私も耳にたがえるくらい言われたことなので、頭では分かっている、恐れずに行動しているつもりでした。ですが、実際にこの語学研修でそれができていなかったことを実感しました。最初の頃は先生の英語が分からなくても、聞き直すことや、分からないと言う勇気がなくてそのままにしてしまっていました。ある時、思いきって分からないと言ったら、先生が快く、そして私に伝えようと一生懸命教えてくれました。そこから、なんだか気持ちが楽になり、先生たちに色々応えたく、きちんと自分が思っていることを伝えようとしたら、授業が今まで以上に楽しくなりました。それをきっかけに、自分の思っていることをきちんと伝えようと思いました。それが、この語学研修で得たものだと思います。

今後の目標として、もっと海外に出て視野を広げて活動しようと思いました。自分が外に出て色々体験することによって、今回のように気づくことがたくさんあるからです。今回は語学研修でセブ島に行きましたが、語学はも

ちろんのこと、語学以外の様々なことも学ぶことができました。セブ島の生活や文化、そこに住んでいる人たちの考え方など、実際にその場所で生活することによって、感じるものが多くありました。それと同時に、当たり前になりすぎて気づけなかった日本のことも気づくことができました。その気づきや、新たな価値観を得たことも、私にとって、この語学研修に行く前後での大きな変化です。このように、自分がいるところから飛び出していくことによって、学べることや新たに気づくことがたくさんあるので、頭でっかちの人間にならないためにも、実際に現地に行きたくさんの事を体感して学びたいと思いました。

このように、このセブ島語学研修は私にとって大きな経験となりました。2週間という短い間でしたが、それ以上に成長できた気がします。そして、またこれからたくさんこのことを経験していきたいと思いました。



学校の先生たちと



先生と教室の前で

## Never say never ～決してあきらめない～

清松敏雄ゼミ 経営情報学部3年 土方 実咲

私は、夏休みの2週間フィリピンのセブ島にあるQQEnglishという語学スクールに英語を学びに行きました。この語学研修に参加した理由は、自分が中学高校大学と学んできた英語が「英会話」としてはどれくらいの実力なのかを、自分に実感させるために参加させていただきました。

QQEnglishでの研修内容としては、私達はまず初日にクラス分けテストを受験しました。そこではリスニングやライティングなどが試験問題として出されました。次の日には自分の成績に応じたクラス分けがされ、私はビギナークラスとして学習に取り組みました。ビギナークラスは1コマ50分の授業を1日の中で6コマこなしていきます。1コマ1コマの学習内容は全て違い、vocabulary(単語)の授業やpronunciation(発音)など様々なものを学びました。授業を進めていく形態は自分と同じような年齢の先生とマンツーマン形式で進めていきました。授業も先生と会話形式で行われていくので気軽に分からない部分の質問も出来るし、授業に疲れたりしたら先生が雑談してくれたりもしたのでとても学びやすい雰囲気でした。

この研修で学んだことは、タイトルにもした通りに「決してあきらめないこと」です。

私は、授業内で英語の文章を読み進めていく上で分からない単語があったり、意味を調べても自分で納得出来なかったりしても先生に質問せずに諦めてしまい、次の問題へと進めていました。そのため問題も勘で答えたりするものも多く、正解しても、少しも自分のためになっていないと思いました。先生方と雑談する時も自分の言いたい単語が出て来なかったりしたら、調べもせずに諦めてしまうことも多かったです。しかしある時それではダメだと

思うようになりました。きっかけは隣で私と同じように受けている生徒さんの授業をみただけです。その生徒さんは先生に分からないことがあったら直ぐに質問もしていて、自分が納得するまでやり続けていました。

そんな姿を見て自分も頑張ろうと強く思うようになり、次の日からは積極的に自分から質問し、簡単に問題を諦めないように頑張りました。そんな姿を見てくれた先生たちも熱心に教えてくれるようになり2週間目の最後の日には初日に比べて格段にスムーズに会話ができるようになっていました。

今後の目標としては、英語以外に対しても決して諦めないようにすること。英語に関して、自分の知らない単語などを1日に2つ3つ覚えていくようにすることやせっかく少しですがスムーズに英語で会話ができるようになったので、それを確実に自分の武器にする為にも、英会話スクールに通い始めようかと思っています。

様々な経験ができ、学ぶことも多くあった充実した2週間でした。この研修に参加でき本当によかったです。



卒業式で友達と先生と撮った写真



授業の教室

## 〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

東京最西端のコンビニに“人の温もり”を見た  
～奥多摩の暮らしを支える「なくてはならない場所」～

経営情報学部 3年 井上 路華

2015年9月7日(月)午後4時、東京都奥多摩町氷川。秩父に連なる緑濃い山なみに囲まれて、小さなコンビニが静かに佇んでいる。これから二日がかりで私が見つめる「相手」だ。台風17号、18号が同時に日本列島に近づいていた。止む気配のない雨の中、私の「作品作り」が始まった。

今回の取材はいわゆる「張り込み」ロケ。夏休みを利用して、はじめて泊まり込みの撮影になった。コンビニを訪れる人たちに一人ずつ声をかけ、話を聞いていく。ロケそのものはとてもシンプルなのだが、実際は想像を絶する厳しさだった。まずぶつかった壁は「人に声をかける」難しさだった。見ず知らずの人に取材させてほしいとお願いしなくてはならない。しかし、その声が出ない。うまく声をかけることができて、断られることが続いた。相手に悪気はないとわかっていても、堪えた。考えてみれば、抱えるほどの大きなカメラを担いだ学生がずっとコンビニの前で待ち構えているのだ。声をかけられた側が訝るのも不思議ではない。

まわりがうす暗くなってきた。それでもここで引くわけにはいかない。粘らなければ・・・。

ようやく話してくれる人に出会えた。感激! 落ち着いた雰囲気のある女性は「近くの書道教室で教えています」とのこと。帰りに甘いものを買うのが、ちょっとした楽しみらしい。初めてうまくいったインタビュー。ちょっと勇気が出た。

夜になった。キャンプに来たという学生がお菓子を買う。ふとコンビニの陳列棚を見てみると、虫除けスプレーや日除けの帽子、サンダルなどが並んでいる。さらに店の外には薪が積んであった。翌日の昼には工事の人たちが弁当を買いに訪れた。車で30分ほどの山梨県の村に住むという人は「台風で動けなくなるかもしれないから、今のうちに買っておこうと思って」と食料品や日用品を買い込む。「県内の街よりこっちの方が近くて。このコンビニは生活に欠かせない」と語る。東京の「西の隅っこ」の小さなコンビニには、想像をこえる、さまざまなお客が訪れるのだった。

「地元の人から観光客まで、様々な人の需要に応じていったらこういう店になった」と、店長の横内将巳さん。だが「経営は決して楽じゃない」とオーナーの岡部誠さん。岡部さんは65歳。店長の横内さんを頼りにしているのだが、「店員も足りていない。慢性的な人手不足」という。経営という意味では、なかなか厳しいなかを一生懸命がんばっているのだからと見えてきた。

ロケ1日目が終わろうとしていた時、一人の女性がやってきた。店を出るときに声をかけようと思っていたが、一向にその気配がない。店内に入って思い切って声をかけてみた。「何を買いにいらしたんですか」「私、ここで働いてる息子の母親なんです(笑)」。なんと! このコンビニで働いている息子さん、つまり店長の横内さんを車で迎えにきたのだった。しばらくすると「息子さん」がレジの裏から出てきて、「いつものことなんです(笑)」とニコニコしながら二人で車へ。朝7時前に開店して夜10時には閉まってしまいうコンビニ。まさかこんな温もりのドラマに出会うとは。夜遅くまで粘った甲斐があったと心底思った。コンビニ周辺はとうの昔に寝静まっていて、鈴虫の鳴き声が響いていた。

豊かな自然が息づき、自然とともに人々が暮らす町、奥多摩には、ゆったりとそしてほのぼのとした時間が流れていた。そんな山間にある小さなコンビニは、人々の暮らしを支え、同時にその人々によって支えられる「なくてはならない場所」として静かに営みを重ねているのだった。



オーナーの岡部誠さん



コンビニの裏には森が迫る

特別寄稿

「メディア実践論」からメディア実践の日々へ

アポロ・プロダクション勤務(2015年3月 経営情報学部卒業) 渡辺 光

「司会のきっかけで照明暗転、VTR スタートします！」

「2カメのピントが甘いのでもうちょっと調整を！」

「次の質問は1カメで上手の受賞者をフォローしてください！」

片耳だけパッドが付いたヘッドフォンと、口元に伸びるマイク。「インカム」と呼ばれる特殊なヘッドフォンをつけて冒頭のような「ことば」で各スタッフに指示するのが私の仕事だ。と言ってもなんのこともかわらないかもしれない。私は今、番組制作の現場で働いている。これは11月21日、多摩映画祭のオープニングプログラム、『第7回TAMA映画賞 授賞式』で的一幕だ。多摩大在学中はボランティアの実行委員として参加していた多摩映画祭に、今年は仕事として現場に立つことになった。是枝裕和監督をはじめ、綾瀬はるかさん、綾野剛さんらの登壇者を目見ようと、バルテノン多摩の大ホールを埋め尽くした1200人の観客を一望できる映写室でインカムに向かって叫んでいた。

メディア環境が大きく様変わりする時代、番組制作と言っても実に幅が広い。私はインターネットの生放送番組の制作に携わっている。Webでの生放送はイベントや音楽ライブとの親和性が高く、番組の制作と同時に舞台進行を任されることも多い。多摩映画祭はまさしくこのパターンだった。ネットでの同時配信はなかったものの、会場に来た観客用に中継映像をスクリーンに投影しながら、同時に舞台監督として照明・音響に指示を出すという仕事だった。

今年4月に仕事に就いてから、全国各地で様々な「現場」を体験してきた。入って早々、6月にはドイツへ出張。サッカーのチャンピオンズリーグで沸く現地の様子を生中継する企画だった。試合前の外国人サポーターにリポーターと一緒にカメラで突撃取材した。(初めての海外旅行がドイツへのお出張になるとは。やっぱり学生時代に海外体験も積んでおかなければ・・・と、ちょっと反省)

最近では、工業高校生が乾電池で電車を動かすプロジェクトの生中継のため秋田へ。カメラマンと共に各ポイントに先回りして効果的な映像を押さえる中継班として、ドローンも活用しながら生中継を行った。その他にも沖縄の離島から地元の伝統的な祭りを中継したり、音楽ライブ中継、政治関係の番組と、北へ南へと飛び回りながら、様々なジャンルで現場を経験している。

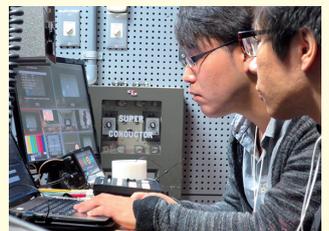
まさに、このプロジェクトゼミで学んだ「メディア実践論」を実践する日々になっているわけだが、教室と仕事で大きく違うのは、ゼミでは1つの企画に対して一歩一歩勉強しながらじっくり取り組めたが、仕事はそうはいかない。毎日違う企画・ジャンルの現場に即座に対応して番組として成立させなくてはならない。朝も昼もなく、夜も! なかなかしんどい事もあるが、未経験のジャンルは刺激的で楽しい。

昨年、木村先生の激励を受けて放送局をめざして就活。エントリーシートは全勝。しかし2次、3次まで進みながら最後の壁を突破できなかった。ドキュメンタリーを作りたいなどと言い続ける学生をどう扱っているかわからなかったのかもしれないが、私が未熟だったと、今はわかる。現在の仕事の積み重ねの先に、目標を見失わず、人間に深く迫るドキュメンタリーの制作をめざしたいと思う。生の現場での瞬発力が今後の制作者人生の糧になることを確信しながら、「メディア実践論」は私の原点だと思う日々だ。

と、この原稿を書いている間にも急遽、宮城県石巻から送られてくる音楽ライブ中継の受けのサポートのために銀座に向かってほしいとの指示が。今日も刺激的な一日になりそうだ。



取材で訪れたドイツ・ブランデンブルク門



多摩映画祭場内中継現場で(奥が筆者)

## SGS で過ごした日々

グローバルスタディーズ学部 4年 高橋 恒英

人に誇れるような学生生活ではありませんでしたが、とても充実精神的に成長することができた、そんな日々でした。

多摩大学への進学を機に、私は神奈川で一人暮らしを始めました。元々地元静岡に思い入れは少なく、都会に憧れを持っていた私は、東京近辺で大学を探していました。英語が好きだったこともあり英語系の大学に絞って探していると多摩大学を知るのにそれほど時間はかかりませんでした。小さな教室で行われる少人数プログラムのシステムと英語で授業を行うところに惹かれ、多摩大学への進学を希望しました。

実際に入学して感じたことは、少人数プログラムのメリットの多さです。私が感じたメリットは3つあります。1つ目は、少人数であるが故に教授に質問しやすいということ。2つ目は、学生と教授の距離が近いのでアットホームな環境で、過ごしやすい。3つ目は、学生一人ひとりに就職支援担当がつくということです。授業で分からないことはすぐに教授に尋ねることができるため、授業の進行速度に遅れることがない。加えて居心地が良く、将来への不安を相談できる環境が万全であったため、余計な心配をせずに有意義に学生生活を送ることができ、就職活動にも臆することなく取り組めたと感じています。

そうして何気なく学生生活をこなしていく日々の中、最も精神的に成長したと感じるのは合同ゼミでマカオを訪れている時でした。3年生の2月頃、観光産業を学ぶ私が所属するゼミを始め、複数のゼミと合同でカジノ視察を目的とした10日間ほどの短期留学をしました。友人がリーダーとしてみんなを率いて、地図と周り

の景色を見比べ、看板の名前や案内表示を見落とさないように視点を動かし、みんなが付いてきているか度々後ろを振り返り気にかけてくれていました。また、人通りの激しいところでは、前から来る人をよけなければいけません。責任ある立場からできる限り逃げてきた私は、リーダーの大変さを全く理解していなかったのです。私は、リーダーが率いてくれている列の最後尾で友人と話したり、スマホをいじりながら付いていただけでした。リーダーの疲労を読み取った引率の教授に代わりのリーダーを任された時に、逃げてきた重い立場の大変さを理解しました。このマカオ観光がなければ他力本願な考えのまま歳を重ねていったでしょう。

常に他力本願であった自分に気づき反省することができたことが四年間で一番の成長だと感じています。誇るべき功績は持ち合わせてはいません。また、勉学にも本気で取り組んではいなかったでしょう。しかし、友人に恵まれ、成長することができたこの四年間は私にとって宝であり、忘れることのないものになりました。



## 多摩大学で学んだ事

グローバルスタディーズ学部 4年 北村 晃司朗

私は、英語が苦手だった。英語アレルギーと言っても過言ではないほどだ。そのため、強制的に英語を使わざるを得ない環境に身を投げれば自然と英語力がつくのではないかと思い SGS への入学を決めた。しかし私の予想に反し、SGS では多くの事を学ばせてもらった。

入学して1年目にある AEP の講義で多摩大学の真髄を感じさせられた。少人数制の講義、英語での授業、そして陽気なテンションの講師陣の三拍子だ。私の英語への苦手意識はすぐに払拭することができた。英語への苦手意識を払拭してからは段々と SGS の英語の講義に慣れることが出来た。しかし、2年次の必修単位である資格英語という壁にぶつかることになった。資格英語では TOEIC で 450 点取らなければ単位を取ることが出来ないのだ。私は、2学年になった頃は大学にも慣れ、遊びにかまけていた。そのため、前期の資格英語はなんとか取ることが出来たが、後期分の資格英語の単位を落としてしまった。しかし、焦燥感を感じることもなく3年に進級し、就職活動が脳裏をよぎるようになった時期に堂下ゼミナールに入ることを決意した。これには、就職活動で少しでも話のネタがほしいという思惑があった。しかし、このゼミナールに入る事が自分の大学生活の一番の転機になった。

堂下ゼミナールでは外国人観光客の観光動向について研究している。そのために、藤沢市観光協会の委託を受け英語のアンケー

トを作成し、江の島で訪日外国人に向けてアンケート調査を行った。このゼミナールの活動で外部の大人達と触れる機会が増え、大人と接する際のマナーや社会に出てから役立つ事をたくさん学ぶ事が出来た。また、SGS の合同ゼミナールでマカオ研修に行った際に、統合型リゾートの勉強を英語でしていく内に英語への興味や楽しさを再び実感することが出来た。今現在ゼミナールでは学会のポスターセッションの発表に向けて準備をしている。ゼミが終わった後の時間には堂下先生に英語を教えていただき、日々英語の奥深さや楽しさを味わっている。

SGS には選択肢がある。自分次第で英語のみならず幅広い事を学べる。様々な事を学ぶのは、自分の将来の選択肢を広げる上でとても大切な作業だ。意味のない学問はないのだ。SGS を卒業する上で学ぶ事を放棄するという選択肢を用意されていない。出席や TOEIC の点数など最低限のハードルが用意されているからだ。いずれにせよ、多摩大学 SGS というのは面倒見の良い大学だ。



合同ゼミでのマカオ研修での様子

## 多摩祭を振り返って…

多摩祭実行委員長 3年 宮崎 遥子

今年で3年目の多摩祭実行委員会。10月19日をもって一区切り。多摩祭開催までふと立ち止まって振り返れば沢山のことがあった。思うと楽しいことばかり起こっているのではないかなと思うくらいだ。準備の段階から人は辞めていく、問題は起こす、クレームは来る、資料持ち出して逃げるなどなど。人生の縮図というのは出来過ぎた話だが、この短期間でいろんなことが起こりすぎだと思う。そんなことを思っているでも仕方ないので意地でもやっていくしかないと思った。結果3年生1人、1年生9人とたぶんなかなか見ることがない組織として多摩祭の準備を再スタートした。ありがたいことに、1年生はやる気をなくしているわけではなかった。自分の持っている仕事をこなそうと頑張ってくれた。もちろん初めてで不安なことも沢山あったと思う。しかし、準備から本番まで頑張ってくれてきた。そして、とてもありがたいことに先輩方に沢山助けていただいた。予定などあって忙しい中、準備や本番のスタッフとして手伝っていただいた。改めて思ったのは先輩方のありがたさと仕事をそつなくこなせるすごさである。

この半年間を振り返ると委員長らしいことは何一つしてなく、かなり周りに助けられてばかりだ。だが、自分ひとりでは多摩祭を運営することはできなかった。いろんな人の協力があって成り立ったと思う。逆のことを言えば自分の実力のなさがよく分かっただけかもしれない。それでも、多摩祭を開催することができ、大きな事故が起こらずに終わることができて良かったと思う。

3年間の多摩祭の経験は自分の中でかなり大きな出来事である。あまり何かだいたいそれたことができたわけではないが、とてもいい経験をさせていただいた。来年に向けて次の代が動き始めようとしている中で、自分は残りの仕事をこなすだけになった。来年はどんな多摩祭になるか、とても楽しみである。



平成27年度 多摩祭実行委員

## 多摩祭企画部から

多摩祭実行委員会 企画部 1年 玉木 真悟

第27回多摩祭の企画部は4人という少人数、さらに全員が1年生という厳しい環境の中で企画を組み立てていきました。初めは皆どのように多摩祭を彩っていくか、議論を沢山重ね、時には喧嘩もして一度はバラバラになりながらも、最後には手と力を合わせ、無事に多摩祭を成功させることが出来たと思います。

今回の多摩祭は『ビンゴ大会』『縁日』『ステージ』という3つの大きな括りで企画を運営しました。ビンゴ大会では合計100以上の景品を用意して、多くの人に感謝の気持ちを配る事が出来たと思います。特にビンゴ大会にゼミ全体で参加してもらった大森拓哉先生は一人で合計4景品を見事に当て、大きく会場を沸かせていただきました、本当にありがとうございます。また縁日は企画部全員が一番力を入れており、射的台・まとの作成、景品の買い出しなどを夏に入る前から準備をしてきました。射的的の景品を見事に当てて、景品を両手に子供が飛び跳ねて喜んでいるのを見て、自分達が組み立ててきた企画で心から楽しんで貰えていると思うと、多摩祭実行委員になってよかったと改めて思うことができました。そして2日目のヒーローショーは多くの子供達に参加していただき、とても素晴らしいショーになったと思います。ヒーローを必死に応援する子供達の姿は、準備や当日忙しかった自分たちも元気を貰う事が出来ました。

人数、経験ともに少ないメンバーでしたが大きく多摩祭を盛り上げることが出来たのは誇りに思います。多摩祭を盛り上げてくださった教職員の方々、一緒に最後まで頑張ってきた多摩祭メンバー、優しく指導していただいた先輩、時間をみつめて手伝っていただいたOBの方、そして多摩祭を盛り上げてくださった参加団体、来場者の皆様に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

## 多摩大学アクティブラーニング

## ～北陸企業視察～

経営情報学部 3年 水口 輝

このたび11月8日から10日の日程で大学主催の北陸企業視察に赴いた。このプロジェクトは北陸経済連合会の紹介により北陸の優良中堅企業4社を視察し、アクティブラーニングを行うというものである。このたび訪問した企業は「津田駒工業株式会社」様、「セーレン株式会社」様、「日華化学株式会社」様、「フクビ化学工業株式会社」様である。

8日に北陸新幹線を使い石川県金沢に降り立ったが第一印象としてとても活気があると感じられた。複数のツアー観光客や外国人観光客などで駅のホームがごった返していたからである。市内も大きなショッピングモールが多数存在していた。また、兼六園行きのシャトルバスも満員状態が続いていた。どれも北陸新幹線の開通により北陸が近くなったのが要因であろう。しかし、駅近くの商店街を訪れたときに、シャッターの閉まっている店舗が多く感じられた。商店街の発展が今後の金沢の発展の鍵となるかもしれない。

さて、ここから今回の本題である企業訪問の内容に移りたいと思う。今回訪問させていただいた企業は、それぞれ各社独自の強みを持っていた。津田駒工業様はジェットルーム、セーレン様は一貫生産体制や布のプリントシステムであるViscotecs、日華化学様は界面化学・表面化学、フクビ化学工業様は異形押出成形である。

私が感じたこととしては、どの会社も自社の現状分析と将来のビジョンを明確にしており社内ですっかりと共有していた。津田駒工業様は中国の次に来るアジア市場はどこなのかを分析し、そこに展開していくこと。セーレン様はITの将来性を確信しており、そこへの積極投資。日華化学様は福祉、医療分野への進出。フクビ化学工業様は次なるニッチ市場の開拓など、を将来ビジョンとして持っていた。ほかにも積極的なアジア展開や大家族主義など面白い考えを多く持っており、北陸という場所、そして北陸企業を知る良い機会となったアクティブラーニングであった。

